九州天皇家論2章 天孫降臨

出雲王朝征服譚

天照大御神生誕は彦島

天孫とは、天照大神の孫である。その名は瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)である。降臨とは天(あま)國から葦原中國へ降った史実をいう。この有名な物語は豊前國風土記にも記録されている。

豊前國風土記 宮処郡

豊前風土記に曰く、宮処の郡。古、天孫、此処より発ちて、日向の旧都に天降りましき。蓋し、天照大御神の神京なり

風土記は天孫、つまり、「瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)」が「豊前國・宮処」から「日向の旧都」に天降ったと伝えている。この風土記の記事は「天孫降臨」の現地記録といえる。場所の名前も具体的である。だが「豊前國」とはどこをさすか。現在の大分県ではない。天照大神がいた「豊前國の宮処郡」とはどこか。「豊前の國」にあった天照大神の神京とはどこか。瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が降臨した「日向の旧都」とはどこか。天孫降臨の地は何故、「旧都」と呼ばれるのか。では、「新都」とはどこを想定しているのか。「大八洲」の特定に続いて「天孫降臨」の物語を読み解いていこう。

天照大神生誕の地は彦島

伊弉諾尊、既に還りて、乃ち追ひて悔いて曰わく、「吾前(さき)に不須也凶目(いなしこめ)き汚穢(きたな)き處に到る。故(かれ)、わが身の汚濁(けがらわしきもの)を滌(あら)ひ去(う)てむ」とのたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸(おど)の橘の檍原(あはきはら)に至りまして、祓(みそ)ぎ除へたまふ。遂に身の所汚(きたないもの)を盪滌(すす)ぎたまはむとして、乃ち興言(ことあげ)して曰わく、「上瀬(かみつせ)は是太(はなは)だ疾(はや)し。下瀬は是太だ弱(ぬる)し」とのたまひて、便ち中瀬(なかつせ)に濯ぎたまふ。

(「日本書紀・神代上」)

このくだりは場所の描写が具体的である。「黄泉」から逃げ帰った伊弉諾尊が「ミソギ」をする土地が「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」である。「日向之橘小門」には「上瀬」「中瀬」「下瀬」と三つの瀬があった。その時、「上瀬」は流れが速く、「下瀬」はゆっくりすぎたので、「中瀬」で濯(すす)いだという。

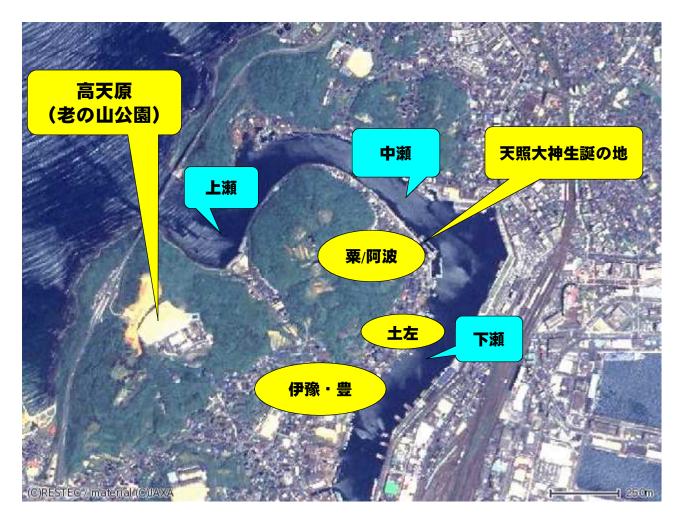
「橘の小門」とは彦島・小戸

「橘の小門」とは彦島・小戸である。この瀬戸は「上瀬」「中瀬」「下瀬」とはっきりと区別できる。「橘」とは本来「立ち鼻」の意である。彦嶋の瀬戸の形は人の横顔に似ている。鼻があり、口があり、顎がある。「橘」とは鼻の形をしている瀬戸である。それは彦島・老の山公園である。航空写真で見れば一目瞭然である。九州天皇家で「橘」と云われ、また「橘の島」と云われたのは彦島老の山公園が存在する地域である。ここは「橘の島」と云われ

天照大神生誕の地は彦島・小戸

続いて伊弉諾が、左の目を洗った時に生まれた神の名は、天照大御神。次に右の目を洗った時に生まれた神の名は、月読命。次に鼻を洗った時に生まれた神の名は建速須佐之男命。・・こう言って、頸に掛ける玉飾りを手に取ったが、長い緒に貫かれた玉の群れは、その時、きららかな音色を発した。そしてなお音色のゆらゆらと響くうちに、この玉飾りを天照大御神に手渡しながら「お前は私に代わって高天原を治めよ」 こう命じ、仕事を任せたしるしに、その玉飾りを賜った。 (古事記上巻)

伊弉諾尊が「禊ぎ」をした場所は「中瀬」である。「中瀬」は大州嶋國生みの物語に登場する「伊豫二名嶋」に存在した四つの弥生集落でいえば「阿波國」に当たる。伊弉諾尊がは左の眼を洗った時に天照大御神が生まれた。「天照」とは本来「天(あま)」の「照」であろう。中国の最初の女帝、則天武后の名前も「照」であった。「照」は女王の名前として最も輝かしい名前だったと思われる。「月読命」は右の眼を洗った時に生まれた。「素盞嗚尊」は鼻を洗った時に生まれた。三人の子どもにはそれぞれ重要な任務が下された。伊弉諾尊は天照大神に「私に代わって高天原を治めよ」と云った。



「天(あま)」は彦島

日本書紀神代上の冒頭は次の神話で始まる。

一書(第四)

天地初めて判るるときに、始めて倶に生づる神有す。國常立尊と号す。次に國狭槌尊。又曰わ く、高天原に所生まれます神の名を、天御中主尊と号す。次に高皇産霊尊。次に神尊。皇産霊、 此をば美武須毘と云ふ。 この冒頭神話も長く誤解されてきた。ここは「天(てん)と地(ち)が別れた」と解釈されてきた。この冒頭神話の舞台は彦島である。天地が分かれた物語は天(てん)と地(ち)が分かれた物語ではなく、彦島(あま)と下関市(つち)が裂けた古代の地殻変動の記録である。「天」は「あま」、「地」は「つち」と読むべきであろう。事実、そのように訓は読む。「天(あま)」とは、彦島側、「地(つち)とは下関側をさす。彦島と下関は地殻変動(或いは地震)の結果引き裂かれた。「高天原」とは「天に存在した高地性弥生集落」の意である。「天」を支配した神が「天御中主神」である。この神の名前の「天(あま)」とは現在は地名となっているが、本来は、神、つまり支配者の人名であろう。

「高天原」は彦島・老の山公園

伊弉諾尊が戻ってきた「橘」とは彦島・老の山公園である。小瀬戸に面する老町から真っ直ぐに坂道が通じている。この「橘」の丘に実際立つと、そこからは西の海、北の下関伊崎町が見渡せる。また、彦島西山町、その 先の小倉戸畑区までが見通せる要地である。



(www.hikoshima.com/photo-oi/oi-05.htm)

この「橘(老の山)」が伊弉諾の國である。國とは弥生集落である。そして、この小高い丘を「高天原(タカ・アマノ・バル)」と称し、低地は「天原(アマノバル)」と称していたのではないか。「高天原」とは「天が支配する高地弥生集落」の意味である。

彦島の小瀬戸に面する町の名は彦島海士郷町である。この町名には「天原(アマノバル)」の名残がある。老の山公園は結構広い場所であるが、現在の私たちが「高天原」に対して抱いているイメージよりずっと小さい。 日本書紀の中に「日神(天照大神)」の田について書かれている。

一書(あるふみ)に日はく、是の後に、日神の田、三処有り。號けて天安田・天平田・天邑併田と日ふ。 霖早(ながめひでり)に経ふと雖も、損傷はるること無し。 「天國(アマクニ)」の王者ですら、田(陸稲を植えたのであろう)が三枚しかないと云うのである。弟の素盞嗚尊に至ってはやせて、雨が降れば流れ、日照りが続けば焦(や)ける畑が三枚しかないと云う。今、彦島老の山公園を見ても、ここにそんなに広い田は作れない。老の山公園の西南の平野部もそんなに広くない。これでは天照大神が「瑞穂」の國を求めて、孫の瓊瓊杵尊を降臨させたのはやむを得ない選択だったであろう。農業生産力の発達に伴って、新たな耕作地を求めた天孫の侵略は先を見据えた賢明な決断だったといえよう。「天一族」が彦島に留まっていたならば、その後の神武東征もなかった。

三人の子ども、天照大神、月読尊、素盞嗚尊は彦嶋老の山で大きくなった。伊弉諾尊が天照大神に与えた「高天原」は老の山公園の弥生集落である。この集落を中心とした大洲嶋の統治権を譲ったのである。

「天の石屋戸」

是に、素盞嗚尊、請して日わく、「吾、今教を奉りて、根國に就りなむとす。故、暫く高天原に向でて、 姉と相見えて、後に永に退りなむと欲ふ」 この時、おほき渤以て鼓きただよい、山岳為に鳴り咆えき

素盞嗚尊が「高天原」に来た時、海鳴りし、山が鳴った。その時、天照大神はどこに居たのか。「橘」である。「ウケイ」という行為の結果、五人の男子と三人の女子を得た。その後も、素盞嗚尊の非行が続いた。ついに天照大神は、「天の石屋戸」に隠れてしまう。

「天の石屋戸」は天照大神が隠れたことで有名であるが、石屋戸自体は特別なものではなかったようである。 國譲り神話で葦原中國」に派遣する武将を誰にするか、検討された場面にも石屋戸が登場する。

是の後、高皇産霊尊、更に諸神を曾へて、當に葦原中津に遣すべき者を選ぶ。 衆日さく、「磐裂根裂神の子磐筒男・磐筒女が生める子経津主神、是佳けむ」とまうす。 時に、天石窟に住む神、稜威雄走神の子甕速日神、甕速日神の子、漠速日神の子、武甕槌神有す。 此の神進みて日さく、「豈唯経津主神のみ大夫にして、吾は大夫にあらずや」とまうす。 其の辞気概し。 故、以て即ち、経津主神に配へて、葦原中国を平けしむ。

ここには「天石窟」に住む神、「稜威雄走神(いつのをはしりのかみ)」が紹介されている。「稜威雄走神」は石窟に住んでいた。石窟は普通の住居だったのであろう。

天照大神が隠れてしまって、「六合の内常闇」となり、昼夜の相代も分からない状態となった。そこで「天の安河」に「八十萬神」が集い相談することとなった。思慮深い「思兼神」が、「常世の長鳴鳥」を集めて長鳴きさせる。この「常世」とは現実の國である。「天香山の五百箇の真坂樹」を掘って、上枝には「八坂の五百箇の御統」を懸け、中枝には「八咫鏡」を懸け、下枝には「青和幣」「白和幣」を懸げて、相興に致其に祈祷した。

ここに登場する「天香山(あまのかぐやま)」とは、万葉二番歌で歌われた天の香具山ではない。本来の「天 (あま)」の香具山である。本来の「天の香具山」は「天(あま)」、つまり、彦島の香具山である。本来の「天の香山」については、伊予國風土記にその記録が残っている。

「伊豫の天(あめ)山」は小戸山

天山(あめやま)

伊予の國の風土記に日わく、

伊与の郡。郡家より東北のかたに天山あり。天山と名づくる由は、倭に天加倶山あり。天より天降りし時、二つに分かれて片端は倭の國に天降り、片端は此の土に天降りき。因りて天山と謂う。本なり。

(逸文伊予國風土記)

「天山(あめやま)」は「倭」と「伊豫」の二カ所にあると伊豫風土記は伝える。この伊予國風土記は「大洲嶋」に登場する「伊予二名嶋」の伊予である。つまり、この風土記は彦島伊豫の風土記である。彦島・伊豫の山が「天(あま山)」と呼ばれていた。この山は伊豫の「東北のかたに」にある。この記録から私たちはこの「天山(あめやま)」を特定することができる。風土記伊予國の「天山(あめやま)」とは小戸山である。

この伊予の「天山(小戸山)」に対して、もう一つの香具山が「倭」に存在する。この「倭」とは奈良ではない。伊 予國の「天山(小戸山)」が分かれた山は九州に存在する山である。彦島の「天山」が「本」で、その別れである 「倭の香具山」とは香春町の「香春一の岳」である。

「倭の天加具山(香春岳)」は畠の畝の姿をしている。よって、「畝傍の山」と呼ばれていた。この山は古事記のイザナギの物語の中で早くも登場している。

・・・御涙に成れる神は、香山の畝尾(うねお)の木の本に坐して、泣澤女神と名づく。

(古事記上巻)

「香山の畝尾」という山が香春町の香春岳である。



天の安河

天照大神が「天の石屋戸」に隠れてしまって、「六合の内常闇」となった。「闇」とは何か。日食というのが普通の理解である。しかし日食はそんなに長くは続かない。太陽は関係ないであろう。「闇」とは恐らく「霧」である。

史上希な濃霧が数日間発生して当たりが見えなくなったのである。天照大神が隠れてしまって、「六合の内常闇」となり、昼夜の相代も分からない状態となった。そこで「天安河」に「八十萬神」が集い相談した。私たちはこの「天安河」を特定することができる。「天(あま)」とは老の山公園の西南に開けた彦島迫町である。彦島迫町を北から南西に流れる河がある。この「迫川(さこがわ)」が「天安河」である。彦島迫町に彦島八幡宮がある。古代はここまで湾が入っていた。ここに「宮の原遺跡」があった。「八十萬神」が集い相談した場所とは、彦島八幡宮が存在する古くから開けた場所だったのである。

■彦島宮の原遺跡

境内には、昭和33年8月に、山口大学考古学小野教授(当時)発見による宮の原遺跡があり、 縄文前期後期の土器や石族、石斧、石錘、石砥等三千余点が出土し、古代人の居住が確認さ れた。昭和34年に発掘調査が行われ、「曾畑式土器」が多く出土した。その多くは、下関考 古学資料室に委託収容されている。

※曾畑式土器とは、熊本県宇土市曾畑貝塚から出土する土器を指標として名づけられたwww.hikoshima-guu.net/petoro.html -



